

夏の美術館での過ごし方

「日本の家」展関連プログラムを振り返って

荒井美月

近年、夏の時期になると美術館での子どもを対象とした展覧会やプログラムも盛んになり、賑わいを見せる。今夏の東京国立近代美術館も例外ではなく、子ども向けプログラムをはじめとする様々な取組みによって活気溢れる空間が生まれた。

本稿では、「日本の家」展「註1」に関連した夏季プログラムについて、教育普及事業を中心に振り返り、活動報告としたい。



図1



図2



図3



図4

「夏の小屋をつくろう 子どもワークショップ」

当館では、毎年夏の時期に合わせて小学生向けプログラムを行っている。今年は「夏の小屋をつくろう 子どもワークショップ」として、出品作家のドットアーキテクト、デザイナーの吉行良平氏とコラボレーションした特別プログラムを実施した「註2」。二日間の参加者は、小学一年生から四年生までの九十四名。友人同士、双子を含む兄弟姉妹など、複数名からの同時申込みも多く見られた。これまでの夏季プログラムでは、主に展示室での鑑賞活動と工作活動を組み合わせた内容を継続しており、今回もその大枠に則りつつ、「企画展との関連プログラムであること」「現存作家との協同プログラムであること」を意識し、今夏ならではの内容となるようプログラムの流れを検討した。プログラムは、参加者を年齢別の三つのグループに分けて進行し「註3」、各グループにはガイドスタッフ（当館解説ボランティア）が数名ずつ付き、子どもたちのサポートを行った。ここから、プログラムの流れを追いつつ内容を紹介していきたい。

開始時刻。まず、全体に向けてスタッフの紹介をしてからプログラムはスタート。この時、前庭で「夏の小屋」を建設中だったドットアーキテクトの家成俊勝氏からは、子どもたちに向けて「小屋をつくるために、色や形などの創造力を使う部分で、みんなの力を借りたい」とのお話があった。小屋づくりに協力するべく、年齢が低い二グループは所蔵作品展「MOMA Tコレクション」で展示中のハンス・リヒター《色のオーケストレーション



図5



図6

ン》の鑑賞へと向かう。色と形についてよく観察した後、パズルパーツを用いて自分なりの再構成にも挑戦した「図1」。この間、年齢が高いグループは「日本の家」展にて清家清設計の《斎藤助教授の家》を鑑賞した後、複数ある住宅模型を「自分が住んでみるならどれが良いか」という視点で選び、選定理由をグループ内で発表・共有した「図2」。グループとも、これらの鑑賞活動と合わせて「夏の小屋」建設スタッフへのインタビューも行った「図3」。「この小屋をどんな風に使ってほしいですか?」「今までに何階建ての建物を建てたことがありますか?」「腰の入れ物には何が入っているんですか?」等々、実際の作家を前にした子どもたちの関心は尽きない様子。

鑑賞とインタビューを終えた後は、いよいよ創造力を発揮する工作活動へと進む。工作内容は「夏の小屋」で使用するためのコースター作りと、屋根部分を飾るためのスタンプ押し、そしてワークショップに参加した証のブローチ作りと盛りだくさんだった「註4」。コースターとブローチは、予め用意された木材の土台の上に、五色のラバーシートを自由な形に切って貼付ける「図4」。ごくシンプルな作業だが、子どもたちにとっては独自の表現に熱中する時間だ。同時に「置いた飲み物がこぼれるといけないから、二枚重ねるのはやめよう。」「使う人が楽しい気持ちになるように、たくさん色を使おう。」というように、制作物が活用される場面にまで想像を膨らませて、様々な工夫を凝らしてい

たのが印象的だった。ラバーシートを貼付け終えたら、裏面に特製の焼印を押してもらい、使う人へのメッセージを書いたら完成となる。一方、屋根を飾るためのテント幕へのスタンプ押しは、養生シートを広げたスタンプコーナーでの作業だ。横に長く広げられたテント幕の前で各自の作業スペースを確認したら準備完了。スタッフからスタンプを押す際の注意を聞き終えたら、早速気になる色や形のスタンプのもとに駆け寄っていく。何度も押すうちに、捻りながら押ししてみたり、力加減を変えて押ししてみたりと、こちらも道具の扱いを工夫しながら、色彩豊かで賑やかなテント幕が仕上がった「図5」。

最後には、建設中の「夏の小屋」にコースターを持っていき、ジュースで乾杯をしたところでプログラムは終了となった。テント幕が屋根に設置された状態をプログラム中に見ることは出来なかったが、「小屋が出来上がったら、また見にくる!」という声も多数あり、本プログラムを通して「次に美術館へ来ることの楽しみ」を提供できたのではないかとと思う。この「夏の小屋」は、「Bar Bamboo Bridge」として、夏の間前庭に設置された「図6」。小屋で使用していたツールも、ワークショップ参加者が制作したものである。このことについても、ここで触れておきたい。

「夏の小屋をつくろう 大人ワークショップ」

子どもワークショップの前日から、「夏の小屋をつくろう 大人ワークショップ」は実施された「註5」。実施初日は日差しの強い真夏日となったが、猛暑にも拘わらず参加者は次々に訪れた。二時間程度をかけ、吉行良平と仕事によるデザイナーのツールを組み立て、仕上げていく「図7」。どんな人でも参加できるようにと、巧みに設計されたツールはさすがプロの技。その中でも座面の形は参加者のオリジナリティが発揮される部分だ。ノコギリを上手に扱いながら、思い思いの形を切り出していく。切り出した形を丁寧にヤスリがけし、数カ所を釘で固定すれば、完成まであと一息。最後に子ども



図7

もワークショップでも使用した特製の焼印を押して完成だ。参加者たちは汗を滴らせ、木屑にまみれながらも、達成感に満ちた笑顔で完成したスツールを手にする姿が印象的だった。

プチプチ・ガーデン

ここまで、特定のプログラムについて振り返ったが、今夏はプログラムに参加せずとも美術館を楽しむことができる仕掛けもあった。

子どもの頃、包装などで使用される気泡緩衝材「プチプチ」^{註6}で遊んだ経験のある方も多いのではないだろうか。出品作家であるファッションデザイナーの津村耕佑氏が考案した、このプチプチを使用したバズルバーツ「プチプチ・タングル」で遊ぶことのできる「プチプチ・ガーデン」が1階エントランスに設置された^{図8}。この場所は、誰でも自由に立寄り、遊ぶことができるフリースペースだ。床と壁に張られた明るい緑色のカーペットは、「日本の家」展の会場構成を担当したアトリエ・ワンによるデザイン。漫画の吹き出しから着想を得たユニークなシルエツトに包まれながら、床に座ってのんびりとくつろぐことができる場所となった。プチプチ・タングルは好きな形に繋ぎ合わせていくことができ、何度も繰り返し使用することができる。服のように身に付けられるものや、家や基地のような大きな造形物など、様々なものを形作ることが可能だ。プチプチ・ガーデンを訪れる来館者は、大人も然ることながら、幼児を連れて家族連れや外国人家族の姿が多くあつたことを考えると、年齢や言語の壁さえ越えて楽しむことができるツールであつたと言えるだろう。館内では「静かに振る舞わなければいけない」と、どこか緊張した面持ちで過ごしている子どもたちを目にすることは少なくない。それでも、一息ついて安心出来る場所として、プチプチ・ガーデンは機能していたように思う。

近年、美術館には当然のように併設されているワークショップルーム等の教育普及設備が



図8

当館にはなく、造形活動が伴う教育プログラムの実施は難しいのが実情である。そのため、所蔵作品展での鑑賞プログラムを主軸として展開しており、これまで企画展に関連した教育プログラムの実施はさほど多くはなかった。ましてや出品作家との協同プログラムとなれば皆無に等しい。しかし、より開かれた美術館を目指す意識が当館内でも強まっており、今夏も「MOMATサマーフェス」として幅広い層に向けた様々なイベントを、館全体で同時多発的に展開した。その一部として、教育プログラムも一層活発な内容で実施することができたように思う。

子どもたちにとって、教科書で目にするような作品を鑑賞する機会を提供できることは、近代美術を扱う当館の強みの一つである。しかしながら、建築家という職業のことも、目の前で立ち上がっていく小屋のことも、その一翼を自分たちが担ったことも、子どもたちにとっては新鮮な出来事であり出会いであつたはずだ。プログラム中、作家を真似て鉛筆を耳に挿してみたり、独り言のように「建築家になろうかな」と呟いた子どもたちの姿を目にする度、同じ時代を生きている作家との出合いを提供できる可能性があることもまた、当館の強みであるように感じられた。今夏のプログラムは、来館者にとつてだけでなく、筆者にとつても学びの多い時間となった。

(企画課研究補佐員)

註

- 1 七月十九日から十月二十九日まで開催された企画展「日本の家 一九四五年以降の建築と暮らし」。本稿では略称で表記する。
- 2 八月十日、十一日の二日間、各日二回ずつ実施。参加者は各回定員三十名(事前申込み、抽選制)。三三名からの応募があつた。
- 3 三グループは、小学一・二年生、小学二・三年生、小学三・四年生の学年別に分けた。
- 4 工作内容については、制作物のアイデアや材料の準備段階において、吉行良平と仕事、ドットアーキテクトの宮地敬子氏に全面的にご協力いただいた。コースターは二枚ずつ制作し、一枚は夏的小屋「Bar Bamboo Bridge」に提供していただいた。活用した。
- 5 八月九日から十一日までの三日間、十八歳以上の大人を対象に実施した。定員は各日先着十名(事前申込み不要)。
- 6 メーカーによって商標は様々だが、「プチプチ」は川上産業株式会社の登録商標。